

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

●巻頭エッセイ 「何のための英語教育なのかを問い続けよう」..... 1	③これからの英語教育に望むこと..... 3
●特集「これからの英語教育に思うこと」..... 1	●「英語の教え方教室」勉強会ミニ報告..... 4
①今一番辛いこと..... 2	・第 46 回勉強会・第 47 回勉強会・第 48 回勉強会..... 4
②皆さんに勤めたいこと..... 2	●編集後記..... 4

巻頭エッセイ 書簡「何のための英語教育なのかを問い続けよう：英語教育の未来」

中井 弘一

親愛なる英語教員同志の皆さんへ

本学を去るにあたり、親愛なる皆さんに私の思いを書簡として伝えたい。それは、「何のための英語教育か」を問い続けて欲しいということである。これから先の英語教育を支え、切り拓く教員であることの生き甲斐をそこに見つけ出して欲しいという強い願いである。

皆さんもご存知と思うが、日本の英語教育はどのように始まったか。文化五年（1808 年）英国船フェートン号事件が長崎で起こり、国防上から英語研究の必要を痛感した幕府が長崎通事に英語学習を命じたのが英学（英語学習）の始まりである。文化八年（1811 年）に『諸厄利亜興学小筈』、文化十一年（1814 年）には『諸厄利亜語林大成』が作成された。極めて簡易な内容〔例 school－スクール書塾（テラ）、library－リフレリ書房（ショモツベヤ）〕で収録語数約 7000 語の辞書である。また、福沢諭吉が蘭学から英学へ学習変更を決心した安政六年（1859 年）には、ジョン（中浜）万次郎が『英米対話捷徑』を作成している。

Q How many letters are there?(コシチャン ハラ メニ ラタシ アー ザヤ)

問曰 幾許字数カ其処ニ在ル

A There are twenty-six in English.

(アンシヤ ザヤ アー ツーエンテ セキス イン エンゲレス)

対曰 英国ニ於テハ其処ニ二十六字有リ

万次郎が聞こえたとおりにカタカナ発音表記した会話書にすぎないものだが、ペリーが来航し開国を迫られ、海外との交渉に差し迫って必要となった英語学習書である。こうして日本の英語教育は始まった。交渉する必要性と新しい知識を得る必要性がその原動力であった。

時を経て、50 年ほど前私が中学生の頃、中学校の英語教科書は、be 動詞か一般動詞かどちらで始めるべきかの論争があった。今では小学校に日常会話の外国語活動が導入され、中学校の教科書もそれに引き続いて挨拶の会話などで始まっている。また 50 年前は、中学・高校生用学習辞書はほとんど出版されておらず、音声に関する学習環境も極めて不十分な状況であった。それが今では、様々な学習辞書・電子辞書・電子黒板があり、多様な英語学習雑誌が出版され、教室には ALT がおり、CD 教材、DVD 教材・ネット教材も豊富にあり、コンピュータで音声も画像も茶の間で学習できる環境がある。果たして、教育環境の想像を超える発展に比例して生徒の英語力も劇的に伸びたであろうか。残念ながら実際は、英語を話せる人材が育成されていないと学校英語教育は非難され続けている。

今、IT 革命とともに情報が瞬間に拡がり、グローバル化した情報・経済が一挙に押し寄せるという高次元の開国状況（International exposure）に日本の社会もある。そのため、国際的な競争への対応が求められ、英語教育においても早期化、高度化がめざされている。

そうした中、皆さんは、英語教育の目的を担当する生徒にどのように話されているであろうか。English is useful because...

- ・ You can talk to lots of new people.
- ・ You can use English when you are traveling.
- ・ You can understand films and TV programs.
- ・ You can understand pop songs.
- ・ It helps you to get a good job.
- ・ You need it if you want to study at university.
- ・ People do business in English all over the world.
- ・ It's the international language for most people.
- ・ You can read English literature in its original language.

こう答えるだけでいいだろうか。もっと世界や日本の未来の動向を考えるべきではないだろうか。5 年後、10 年後、20 年後の日本や世界はどうなるであろう。これから先の世界を VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) World と表現することがある。「不安定な、爆発寸前の」「はっきりしない、不確実な」「複雑で理解しづらい、込み入った」「あいまいな、多義的な」世界である。環境問題が深刻化し、テロは終止せず、分断傾向が進むなど先行き不安定で不透明な状況にこれからの子どもたちは生きていく。「グローバル化に対応するため」という単純な英語教育目的論だけでは回答にならないのではないだろうか。思考力、共有力が一層求められるであろう。

現在、世界の人口は 70 億人、その中で、母語話者、公用語話者、外国語話者などを含め、英語はおよそ三分の一が話しているとされる。欧州国家では一人の人間に複数の言語能力があり、現実の場で必要に応じて言語を切り替えながら社会的な課題を解決する Pluriculturalism (複文化主義) と Plurilinguism (複言語主義) を教育施策に取り入れようとしている。母語以外にもう一つ言語を話せること、相手と共有された言語によって文化差を乗り越えて意思疎通を図ることを、社会としてではなく個人の能力としてその育成をめざしている。

さて、このように様々なことを考えていくと、これからの日本を背負う若者に英語教育の目的をどう伝えていくべきであろうか。「英語によってより多くの人々とのコミュニケーションが可能になる」「外国語学習によって学習者の人間性・知性が育てられる」に留まらず、英語そのものが文化である言語文化を扱い、英語社会において物心両面にわたる活動の様式と内容の総体となっている、ものの見方や価値観を生徒に考えさせることもミッションとして大切であろう。

時代は絶えず変化し続ける。その変化の中で仲間の皆さんには戸惑うことが多々生まれることであろうと思うが、そういう時には立ち止まって、仲間とともに「何のための英語教育なのか」と絶えず問い続けて欲しいと願って、この最後の投稿書簡を結びたい。

頓首

特 集

「これからの英語教育に思うこと」

① 今一番辛いこと ② 皆さんに勧めたいこと ③ これからの英語教育に望むこと

「これからの英語教育に思うこと」の特集として、教職ネットMLを通して皆様の中高等教育の英語教育に対する意見・思いをまとめました。上記3つのジャンルのどれか一つ選んで、考えおられることを 200 字程度でまとめていただく投稿を募りました。

「今一番辛いこと」

- ・ SNSやスマートフォン利用者が増加した影響からか、ネット社会では積極的に人と交流するが、対面した人には発言を躊躇し、遠慮する光景が多く見られる。また、何かを知りたくても人に聞かず、スマホで検索する人も多い。確かに便利ではあるが、その行為は主体的なのか受動的なのか疑問を抱く。言語を教える者の一人として、新鮮魚市場での生身の人間同士のリアルタイムでの言葉のやりとりを見ると安心するのは私だけだろうか。

(戸田行彦・滋賀県立守山中学校)

- ・ 教員生活18年の間に求められる英語力が変わったと感じます。瞬時に本物の英語に触れられる世の中で、自分自身の英語力の無さが最も辛いことです。謙虚に学び続けることが大切ですね。今は日々の授業や教材研究も自分自身の英語学習の機会であると捉え、完璧ではなくても、常に better を目指して学び続けています。生徒とともに学び合いながら、外国語学習の先輩としての姿を生徒たちに見せられればと思っています。(S.K.・兵庫県立尼崎小田高等学校)
- ・ 現在つらいと感じることは「教材研究・自己研鑽」のためにとれる時間が少ないことである。言語というのは日々進化し、英単語も日々増えている。英語科は他教科に比べて日々研鑽せねばならない要素を多く持つ。しかしながら、山のように積まれた分掌業務や部活動に追われ、英語に触れる時間をとるのは難しい。英検や TOEFL のスコアを課されても勉強する時間や受ける時間さえもない教員が大多数という事実がつらいといえる。

(谷野圭亮・大阪府立大学工業高等専門学校)

- ・ 今一番辛いことは、何のために教育に携わってきたのかわからなくなってきたことです。教育は世の中の動きと無関係であってはいけないと思いますが、今はその流れが正しいのかどうかを立ち止まって考えることをできないまま突き進まなければならない状況にあるのでは、と感じています。1年間の非常勤講師の経験も含めると、来年度は英語を教えることを生業として30年目となります。教育は未来を創る仕事だと思ってきましたが、この間で私の仕事は希望がある未来に役に立ったのだろうか、それを考えると大変辛くなります。

(西村久仁美・京都市立西京高等学校)

- ・ 今年転職して、今新しい学校のあり方を検討しています。管理職は色々な意見を取り入れた学校づくりをしたいとおっしゃっているが、実際は違います。若手の意見は受け入れられず、保守的な意見ばかりが通っていつているような気がします。革新的な学校を作りたいのなら、若手の意見に耳を傾ける先輩や上司が必要だと思います。英語教育をよりよくするためにも、若手の意見が尊重される現場を作っていけたらと思う毎日です。

(坂本美佳・(新校)長浜北高等学校)

- ・ 指導の方向性が違うこと。生徒に英語の力をつけさせたいと思う気持ちは一致していても、英語の内容理解のその先のこと、そういった授業展開に関しては意見を受け入れてもらえないことが多い。また、新学習指導要領(とりわけアクティブ・ラーニング)に関していえば、(年齢的なもので)自分には関係がないと思っている教員もおられて、こちらが勉強したことを話しても受け入れてもらえないこともある。

(Y.M.・大阪府立高等学校)

- ・ 今年は児童生徒支援教員 T2 という立場で、英語授業時の生徒の躓くポイントやその都度気づいたことを T1 の先生に伝えています。今の立場ですごく困っていることを挙げるなら、T2 としてケアしている生徒の躓きを瞬時に取り除くにはどうすれば良いかということです。それには、その授業での躓き以前の、かなりさかのぼった事を考えなければなりません。本校では3年生から英語数学でハーフサイズ授業を展開していますが、間に合わないと感じます。特に英語では、低学年からハーフサイズを実施したいと痛切に願っています。

(岸本みのり・猪名川町立猪名川中学校)

- ・ 「英語の教え方教室」を始めとする様々な勉強会にほとんど参加できず、授業改善するチャンスを自ら逃してしまったことです。本年度、

教員になって初めて中学生を担当していますが、授業の進め方や雰囲気作りにおいて壁にぶつかっています。経験だけに頼った授業では、生徒のやる気や知的好奇心を引き出すことが難しいことを痛感しました。次年度は、「自らの引き出しを広げるため、積極的に行動するぞ！」今、そんな思いでいます。

(真田弘和・神戸大学附属中等教育学校)

「皆さんに勧めたいこと」

- ・ 「下手な英語の授業をするくらいなら、英語の諺の一つ教える方がましだ」。外山滋比古先生は言われた。そのとおりだと最近つくづく思う。私たち英語教師は英語を通して生徒に何を教えるのか。彼らに生き方を学ばせるべきでないだろうか。それならば、英語の諺は格好の教材だ。今年は最初に「Knowledge is power!」「知は力なり」を教えた。情報から知識を得て、知識を知恵に昇華させる。けっこう生徒は喜んで声を出し覚えてくれる。生きるためのアドバイスを先人が残してくれているのだから、使わない手はないだろう。

(池田裕・大阪府立枚方津田高等学校)

- ・ 英字新聞の活用は生徒の知的好奇心を刺激するうえでとてもいい方法だと思う。特にヘッドラインを取り上げるのは時間もかからず手軽に授業のウォーミングアップにいいのではないだろうか。① up to date なもの②びっくりするもの③議論を呈するもの、を意識してニュースを選ぶのがコツだと思う。その際、単語を虫食い状態にする生徒の食いつきがよくなると思う。これまで取り上げたものは、

① () trumps hate

② () used as recruiting assessment tool

③ Philadelphia approves () tax amid protests

() の中に入る単語を皆さんも考えてみてください。

答え① Love ② Mahjong ③ soda

(李由紀子・大阪女学院高等学校)

- ・ 皆さん、いっぱい語り合いましょ。他校種との知合い。他校種の先生と。他府県の先生と。取り組んでみたアイデアのこと。授業改善のこと。英語教育への思い、迷い。1人ではなかなかいい案も浮かびません。うまくいかなくて落ち込むかもしれません。独りよがりになっているかもしれません。語り合うと、楽になります。思いと 생각이化学変化を起こし、新しいものが生まれます。いっぱい、いっぱい語り合いましょ。

(小梶清嗣・滋賀県立八日市高等学校)

- ・ 次の高校卒の語彙目標が 4000-5000 語となり、現状の 3000 語もままならない現場にいるせいか、ますます生徒間格差が広がると危惧します。生徒の motivation や aptitude が目標設定や英語の授業の構成を多に左右します。特に個人差が大きい場合に、生徒の自発的な学びを育成するには、教員は一刻一刻判断を求められます。個々で自分の引出しを増やし、ここの勉強会のように、実践や情報を共有し、意見交換が活力の源になります。ともに勉強を続けましょ。

(山崎陽子・大阪府立吹田東高等学校)

- ・ 私は「繋がり」を大切にしています。特に人と人の「繋がり」です。職場では人との「繋がり」を大切に組織の中でどう動くのかを考えるように心がけていると思っています。また人との「繋がり」で学びの機会が増えています。恩師、勤務した高等学校や中学校、そして現在の勤務校である中等教育学校、中井先生の勉強会やその他で出会った先生方のご紹介などで「繋がり」が広がり、私の学びは広がっていると感謝しています。これからも「繋がり」を大切に学び続けていきたいです。

(泉美穂・神戸大学附属中等教育学校)

- ・ 中学生の娘が使っている教科書準拠のワークを見てびっくり。疑問詞を使った疑問文の書き換え問題。場所や時を表す単語に下線が引いてある。でも問題文はすでに疑問文。Did you go to Kyoto yesterday? 本人は yesterday は When に書き換えるだけ。疑問詞の後は疑問文という大切なルールに気づく機会を失っている。文法より発信重視の時代? でも文法の違いで多言語、異文化への興味が沸く。文法から英語への興味が沸いた。違っているからおもしろい。日本人は準備万端でないと安心してチャレンジできない国民性。とにかくしゃべってみてなんて恥ずかしくてできません。文法知識は最強の武器。文法から英語の面白さを伝えたい。

(重村ひろみ・京都府立南陽高等学校)

「これからの英語教育に望むこと」

- まず、教師と児童生徒が、「教育愛」で互いの心をあたため、英語脳を十分にウォーミングアップするチャンスを与え、英語学習に熱い学習者を育てられる教職員のチーム力を望みたい。英語に対する子どもの考え方はさまざま。「一生勉強・一生青春」の精神で、末永く自律的学習者であるよう、アクティブ・ラーナーが一人でも多く育つことを期待したい。そのためには、教員自身が常に学んでいなければならないと思う。(中西勝弘・滋賀県立八幡高等学校)
- 海外の学生たちと交流授業を行っていたときのこと。普段の授業で、英語ディベートを中心に取り組んでいる生徒達から、発言が1つも出ない—これは英語力というより、コミュニケーション能力の問題。将来英語を生かそうとするならば、この2つの力は必須である。だが、英語の実践活動だけでこの力を伸ばすには限界がある。この力を、どうやって英語を生かせる段階まで育てていくか。これは、私自身の今後の課題でもある。(堀尾美央・滋賀県立米原高等学校)
- 英語の授業で平和、環境、思いやりなどの教材を扱い、生徒たちはよく考え、良い意見を述べ行動しようと考えられたアウトプット活動ができています。しかし現実には、それが行動にはなかなか移すのは難しいようです。授業で学んだことと、実生活をつなげ合わせて、自分のものとする。また自分自身が行動できること。いかに行動できる生徒を育てることが大切かと思えます。(山口朋久・湖南市立石部中学校)
- 英語教育に望むことというより、自分が今後やってみたいことは、文学作品を英語教材として扱うことだ。答えのない問い、「解釈」が必要な言葉に出会った時、自分も生徒も一番いきいきしているように思うからだ。4技能統合型の授業で文学作品を扱うとなると、「解釈」に至るまでの理解の部分で、多くのハードルを乗り越えなければならぬ。どのような手法が効果的なのか。自分なりの答えを見つけないかと思う。(篠原泰子・神戸大学附属中等教育学校)
- なぜ英語教育が必要なのか。受験のためや仕事を得るための目的では悲しすぎます。一度きりしかない人生を豊かに楽しむために、必要なツールのひとつが英語だと考えています。英語教育の目的とゴールを明確にし、教師も生徒もお互いに学び合い、高め合える場を共有することが大切なのではないでしょうか。私は学習者中心の授業を心がけ、生徒一人一人の可能性を引き出し、仲間と協力しながら自信を持って生きていける生徒を育てたいと願ってきました。そして、他者を思いやる優しい心を持ち、何事にも一生懸命に取り組む熱心な生徒達と出会いました。また、国際交流を通じてたくさんの外国人と知り合い、広い視野で物事を見ることができるようになりました。これからは出会いを大切に、生徒や仲間と共に学び続ける教師でありたいと思っています。〈中井先生やみなさんとの出会いに本当に感謝しています〉(山根貴子・姫路市立飾磨高等学校)
- 「理想の英語教育」とはどのようなものであろうか。私は、テストできちんと点を取れる生徒を育てることが悪いとは思っていないが、これが最終のゴールであるかのような英語教育からは、脱却すべきと思っている。設問に対して的確に解答できる生徒を育てていかなければならぬのはもちろんなのだが、ゴールはそこではないと思っている。英語を世界とつながるためのツールと捉え、世界の人たちと言葉を交わし、互いをより深く理解していける人間を育て、その個人が人生を豊かにすることに英語の能力が使われるべきだ。そして、他を理解し人と心を繋げる力に溢れる個人が集まり、より喜びの多い社会が形成されていくことに英語教育が貢献できれば素晴らしい。(加藤統久・和歌山県立那賀高等学校)
- 中高一貫校に勤務し、教えられたことが二つある。一つは6年間でどんな英語力を育成するのかを明確にせず中1を教えてはいけないということ。もう一つは学校がどんな生徒を育てたいのか、教科を超越して全教員が共有する必要があるということ。英語をツールとし自らの考えを発信し、また他の考えを受信許容する力をもつ生徒の育成には教科横断的な協力体制が不可欠である。生徒一人ひとりが社会に出た後どう生きるのか、将来を見据えた取り組みを英語教育こそ実践していけるのではないだろうか。(松川慈・奈良県立青翔中学校・高等学校)

- ことばは個人間で得手、不得手はあるが、人間に備わっている基本的な能力の一つである。ことばを使う機会を与えない限り、使えるようにはならない。このように考えると、今の英語教育の現場で不足しているのは「読んだり、聞いたりしたことを元に、自分の頭で考え、話したり、書いたりすること」だと思う。インプット→インデックス→アウトプットの流れを意識して指導することが大切である。誤解を恐れずに言うならば、「生徒に英語を使わせる機会をもっと与えよう。」No Pains, No Gains!

(岡本泰・三重県立名張高等学校)

- 話が大きくなりますが、英語教育はやはり世界平和に資するものであるべきです。元来、言葉の通じない者同士が、多くの時間とエネルギーが必要かもしれないが、英語を用いて互いに理解し合う、そのためにこそ、未来を担う世代に英語教育を施すのです。「グローバル化」とは、地球規模で格差を生み出すのではなく、地球規模の課題に対して、共に向き合い、解決しようとする姿勢のことを指すべきだと確信しています。

(吉野欽哉・滋賀県立守山高等学校)

- これからの英語教育は、英語科教員の相互扶助によって成り立つと思います。マンパワー依存では、もはや時代遅れです。あらゆる年齢層の英語科教員が丸一となって団結・協力し、今後は「誰が教えても」「同じように教育的効果が現れ」「ただ活動させるのではなく」「生徒に深く思考させ」「良質のアウトプットをもたらす」授業ができることが強く求められると思います。今後の英語教育はまず、教員のこのような共通認識から始まると思います。

(三仙真也・福井県立藤島高等学校)

- 私が英語の教職に就いてから、まもなく35年が経とうとしています。予想以上に、私たちを取り巻く世界は大きく変わっているのに、学校現場での英語教育がそれほど変わっていないことに、愕然としています。街に出て、片言の英語すら話せない若者たち。いえ、話す内容を持っていないのです。これからの英語教育に求められるのは、まずは、生徒たちのアイデンティティを目覚めさせること。そして一番必要なのは、教師自身が変わることかもしれません。頑張りましょう。

(北村浩子・大阪府立豊中高等学校)

- どれだけ「コミュニケーション」、「4技能」、「オールイングリッシュ」などの文言が並んでも、従来の指導方法や内容からあまり変わらない現場はまだあるだろう。ディベートやディスカッションは教員にも敬遠されがちだが、近い将来どの学校でも取り組めるよう、文科省がモデルプランを示し、それらを指導できる人材を育成し、生徒も教員も物怖じせず楽しみながら英語力を伸ばせる教育環境を整えられれば日本人の英語力は劇的に向上するはずだ

(川久保和代・京都市立堀川高等学校)

- English is not just a subject for examination but a tool for communication.* 英語という「言葉」を教える中で、人格を形成していくことが教育の目的だと思います。つまり、生徒が英語を読みたい、表現したいという気持ちになる、そんな生徒の心を揺さぶる授業デザインをすることが教師の役目だと思っています。日本の英語教育が、短絡的な視点ではなく、「言葉」を教えるという本質的な視点で考えると、大きく変わっていくのではないかと思います。

(宮崎貴弘・神戸市立葭合高等学校)

多くの先生からの投稿に感謝である。ここには、諸課題がある中で、目の前の生徒の可能性を信じ、未来を生きる力を生徒に付けたいと願う思いがある。未来を見据えたあなたの授業哲学を大切に、心を揺さぶる授業をともに求道しましょう。(N)

Precious are people who walk entirely on a straight life's road. Precious are people who devote their entire life to education. Here I swear: I will live a life devoted entirely to education. I will walk a little farther on my life's straight road single-mindedly. (SAKAMURA, Shinmin, Translation mine)

一すじに生きるひとの尊さ
一すじに歩むわたる人の導き
われもまた
一すじに生きる
一すじに歩まん



《坂村真民》

「英語の教え方教室」勉強会 ミニ報告

第 46 回「英語の教え方教室」勉強会

平成 28 年 10 月 15 日(土)

「これまでの私の教育実践と英語力向上のための 八日市高校での取組」

滋賀県立八日市高等学校 小梶 清嗣 教諭



晴天の秋晴れの日に 20 名の教員が集まって小梶先生の発表を以下のレジュメの下に話し合った。最初に小梶先生が教員人生の節目の中で英語や英語教育に関して感じとられたことを紹介していただいた。

- 1984-1987 安曇川高校 4 年間 (22 ~ 25 歳) ・新任時代
 - ・「文法訳読オンリー」…「人は自分が習ったように教える」
- 1988-1997 河瀬高校 10 年間 (26 ~ 35 歳) ALT 導入の波
 - ・滋賀・ミシガン交換教員プログラム 1989-90
 - *「関係詞や仮定法って本当に使った！」…学校文法の必要性の再確認／表現力のアップ
 - *「Native-like でなくてもいいんだ！」…自分なりの英語
 - ・韓国修学旅行 1992
- 1998-2005 八幡高校 8 年間 (36 ~ 44 歳) オーラル・コミュニケーションの波
- 2006-2016 八日市高校 11 年間 (45 ~ 55 歳) アクティブ・ラーニングの波

特に現任校での実践を紹介していただいた。「Say it in 30 seconds!」「Say it in 5 sentences!」即興性から書く活動へでは、桃太郎や浦島太郎、赤頭巾ちゃんや白雪姫などを 30 秒、5 行の文で説明する活動を参加者で行った。Definition 即興性からカテゴライズ、文法の意識も身につけるでは、tiger : a large (w) animal that has yellow and black (l) on its body and is a member of the (c) family などを共に考えた。あと、サマリーや「なりきりインタビュー」の体験学習なども非常にわかりやすく発表していただいた。終了後、参加者から最大級の賛辞を小梶先生は頂いておられた。



第 47 回「英語の教え方教室」勉強会

平成 28 年 11 月 19 日(土)

「高校3年の受験指導における 4 技能を生かした 活動の模索」

京都市立堀川高等学校 川久保 和代 教諭



発表者の川久保先生を含め 26 名の教員が集まった。進学校ゆえ受験指導優先の英語教育が求められる学校体制で、少しでも工夫した活動を取り入れたい気持ちが川久保先生の発表の根底にあった。

まず始めに、自身の教育実践に対し、「I'm struggling for better teaching methods every day …」であると話された。Copy & Paste ならぬ Copy & Rearrange → Customize を。先達、先輩、同僚たちの優れた授業実践を Copy しながらも、学校・目標・クラスや進度に応じて Rearrange し、目の前の生徒たちに適した授業の形へと熟考し Customize することを心がけているとのことであった。

通常の基本形態は、まず予習を前提にしないで、授業の場で完結するというスタイルである。

- ・新出語の英英辞典の定義を載せた Vocabulary sheet
英英辞典で調べた定義が付記された単語リストを配付し、その定義から単語を当てさせるクイズを行われていた。

- ・Take a moment to think (warm-up)

教科書 Crown の English Communication には「Take a moment to think」を考えさせるとのことである。

- ・Listening Comprehension : CD で本文を流し、それに英問英答の活動を行う。

- ・Grammar and Phrases : 教科書に付記して



ある注意すべき語法、句などの例文を提示し確認

- ・Reading Practices : 暗写プリント (Shadowing、Overlapping、日英→英日) 教科書本文と日本語訳付記したプリントの配付、ペアによる英文の意味の確認、一部ブランクにした本文英文の穴埋め練習、でこぼりリーディング (例 : 一行のみ提示) “The capsule 土壌サンプルを載せた (wiss) 着陸した (l) safely in the 砂漠 (d) on June 13, 2010.” と日英織り交ぜた本文をプリント提示、() 内のアルファベットでそれ始まる単語を考えて英文を再現するものである。
- ・Question & Answer (生徒同士) : (パートごと?) Summary (ペア練習→クラスで)
- ・レッスン終わりに発表活動 (ex. なりきりインタビュー、写真持ち寄りプレゼン)

3 年生になると、受験指導が優先され、4 技能を組み込んだ活動をどう工夫すれば良いかが話題となった。進学校での授業はスピードがあり、その分、紹介される活動内容が多く、一つ一つの活動を丁寧にフロアーで話し合えていただけないのがもったいないほどであった。

第 48 回「英語の教え方教室」勉強会

平成 28 年 12 月 17 日(土)

「課題発見力を育む授業—生徒の問いを全員の問いにする—」

立命館守山高等学校 講師 由谷 晋一



年末の声が届く時期に 24 名の参加を得た。今回、立命館守山高等学校の由谷先生に実践発表と話題提供していただいて、それを下に話し合った。今回の発表に由谷先生がかけられた情熱と授業改善への意欲と工夫が参加者の心打った。考えるべき事項が盛りだくさんの充実した発表であった。

まず、野村万作の『山月記』の朗読を聴いて、狂言師に弟子入りしたという話から「習う」ことの意味を考えた。今回、「気づき」を大切にする授業、これが発表のキーワードであった。そこで、日本語の気づきに相当する英語にはどのようなものかを話し合った。notice, recognize, realize, discover, understand, aware, conscious, observe 等の言葉が出て来た。それぞれの意味を踏まえ何をどのように気づかせるのかを考えることが大切である。気づきとは「物事に対しての今までとは異なる理解や認識」である。気づきを促す要素の一つに多様な学習形態がある。一方的な教員の説明でなく、個別に自身で取り組ませることが大切であろう。自分のペースで学ばせる時間は気づきを促す要素であろう。リスニングとリーディングの組み合わせなどの多様性も大切である。由谷先生は、常にそうしたことを考えてワークシートを作成し、授業を展開を考えておられるようであった。

多くの教員が陥りやすい授業進行として、教員は自分が想定した展開を進める。これが生徒の気づきの妨げになることがある。理解の展開としてよかれと教員が思っている、敷いたレールを歩ませているだけである。由谷先生は「質問に対してすぐに答えを求めるようなことしか、自分は尋ねていなかった。生徒が考えた質問には、なぜその質問をしなくなったのか共有したい質問がある。今までの思いこみと新しく得た知識のズレ、まったく知らなかったことと意外な真実とのズレなど、さまざまなズレをどう感じとって考えるかが大切」と話された。また、解答を知っているものが、相手にその解答をさせる、つまり解答を導き出す質問を考える A & Q 活動も紹介された。これにより問いかけの力が増すのではという考えに基づくものであった。



編集後記

毎年 4 号をこの 7 年間私の編集で発行してきた Newsletter も今号の第 28 号で私の任務は終了いたしました。これまで支えていただいた皆様に心よりの感謝の意を表してお別れしたいと思います。(N)

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造 2 丁目 26 番 54 号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp